最優秀賞
文部科学大臣賞

寄付は寄付だけではない

〔山形県〕　山形県立米沢興譲館高等学校　1年　**渡會　愛香**

私の母はシングルマザーである。とはいえ、私は学校に毎日通えているし、その日の食事に困ったことは一度もない。父と離婚が決まったとき、母は言った。

「私たちは日本に生まれているだけで幸せ。途上国では、もっと苦労している母子家庭もあると思う。本当に尊敬する。」

小学四年生の私は考えたことがなかった。母の言ったことを調べてみて初めて、私たちのような母子家庭という存在が、世間から手厚い支援を受けていることを知った。児童扶養手当、ひとり親家庭等医療費援助制度、…きっとまだまだあるのだろう。発展途上国については、調べても情報をあまり得られなかった。挙句には「知ったところで何もできない」と思ってしまい、調べる手を止めた。しかし高校生になり学校でSDGsについての学習に取り組んだときに、ふと思い出した。海外にだって母子家庭はある。彼らの助けになる方法が必ずあるはずだ。それだけの想いで自分にできることを探した。

そうして見つけたのが、ケニアのシングルマザー食料支援ボランティアだ。三人の子供をもつお母さんとオンラインで繋ぎ、話を聞いたり、寄付金を受け取ったお母さんの買い物の様子を見たりした。話を聞いて最初に驚いたのは、そのお母さんの月収と家族全体の食生活だ。家賃は月五万円なのに対し、月収は三〜四千円。食事は一日に一・二回とる日や、何も口にすることのない日があるという。信じられなかった。自分がどれだけ恵まれているかを痛感した。日本で暮らす私の母。ケニアで暮らすお母さん。同じ人間で、シングルマザーなのに、こんなにも境遇が違うのだ。その子供にも同じことが言える。加えて、今まで自分が知らなかったことを後悔した。もっと早く知っていれば、自分が日本に生まれ、母子家庭ながらも平穏に暮らせていることに感謝できていたはずだからだ。支援金を受け取り、買い物を済ませたときのお母さんの笑顔は、今も忘れられない。“May God bless you.”といい、一ヶ月分の食料を抱え、嬉しそうに家に帰っていった。私も胸がいっぱいになり、お母さんの喜びが同じことのように感じられた。

このボランティアでは、参加者は皆「チャイルドドクター制度」という医療支援制度に加入し、一人の子供にお金を寄付する。「寄付は、裕福かつ心の広い人がするものだ。感謝や見返りがなくてもいい、お金に余裕がある大人が。」以前までの私の考えである。初めて寄付をして数週間。母に、支援先からメールが届いた。支援している子供のお母さんからである。文面には、子供の健康状態や私と母の近況を気遣ってくれる内容とともに、感謝の意が表されていた。私は自分が間違っていたのだと悟った。寄付は、寄付だけではないのだ。支援者と被支援者が互いに理解し合い、心を寄せ合うこと。チャイルドドクターになって、それを実感することができた。また、自分が世界の人の為に貢献し、繋がることができているということが嬉しかった。

“寄付”や“発展途上国”と聞くと、「そんな大それたことはできない」と身構える人がいる。確かに途上国が集中する地域は日本から遠く離れており、大きなことに感じるかもしれない。見えないところで苦しむ人々がいるのはみんな知っているだろうが、実際に寄付する人というのはまだ少ない。だから、自分の身の回りの人が苦しんでいることを想像し、“自分事化”することで、一円でも支援しようと思えるのではないか。私の場合、その対象が自分の母親だったという一例にすぎない。これを読んだあなたが、少しでも寄付で世界の人と関わろうとしてほしいと思う。

地球のためにできること。それは、人との繋がりの中で初めて成立するのではないか。その為に私は、これからも、大人になっても寄付を通してチャイルドドクターとして、人の役に立ち、交流を続けたい。いつか、誰一人取り残さない社会が実現することを願って。